

第十講 古今著聞集

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

なかごろ、なまめきたる女房ありけり。世の中たえだえしかりけるが、

みめかたちあいぎやうづきたりける娘をなむもたりける。十七八ばかりな

りければ、これをもいかにもして、めやすきさまならせむと思ひける。かな

しさのあまりに、はちまん八幡へ娘ともに、泣く泣くまゐりて、夜もすがら御前に

て、「我が身は、今はいかにてもさぶらひなむ。この娘を心やすきさまに

てみせさせ給へ」と、すず数珠をすりて、うち泣きうち泣き申しけるに、この娘

まゐりつくより、母のひぎを枕にして、おきもあがらず寝たりければ、あかつき暁

がたになりて母申すやう、「いかばかり思ひたちて、かなはぬ心にかちよ

りまゐりつるに、かやうに夜もすがら、神もあはれとおぼしめすばかり申し

給ふべきに、思ふことなげに寝給へる、すうたてさよ」と、くどきければ、

娘おどろきて、「かなはぬ心にくるしくて」と言ひて、

いはしみず⑥ 身のうさをなかなかなにと石清水おもふ心はくみてしるらむ

と詠みたりければ、よ母もはづかしくなりて、ものも言はずして下向するほ

どに、七条朱雀の辺にて、世の中にときめき給ふうんかく雲客、き桂より遊びて帰

り給ふが、この娘をとりて車に乗せて、やがて北の方にして始終いみじかり

けり。
※大菩薩だいぼさつ、この歌を受納ありけるにや。^⑧

(注) ※八幡：石清水八幡宮。

※雲客：殿上人に同じ。

※桂：京都郊外の地名。桂川西岸の地域。

※大菩薩：八幡大菩薩。石清水八幡神のこと。

問一

傍線①②④⑤の意味として最も適当なものを、次のそれぞれのア～オの中から選び、その記号をマークせよ。

①「なまめきたる」

ア	しつとりと美しい	イ	はなやかに優美な
ウ	思慮深く聡明な	エ	思慮が浅く軽率な
オ	頑固でわがままな		

②「あいぎやうづきたりける」

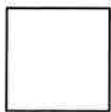
ア	ぼんやりした所があった	イ	整わない欠点があった
ウ	かわいらしい魅力があった	エ	すこやかに成長していた
オ	おとなびた様子をしていた		

④「かちよりまゐりつるに」

ア	遠方からうかがったのに	イ	自邸から参上したのに
ウ	急いで参上したのに	エ	苦勞して参詣したのに
オ	歩いて参詣したのに		

⑤「うたてさよ」

ア	わずらわしいことよ	イ	つまらないことよ
ウ	かわいそうなことよ	エ	なさないことよ
オ	おそろしいことよ		



問二 傍線③「心やすきさまにてみさせ給へ」とあるが、「心やすきさま」という状態が表れている、十五字以内の部分を、文中から抜き出して記せ。ただし、句読点は字数に数えない。

問三 傍線⑥「身のうさをなかなかなにと石清水おもふ心はくみてしるらむ」の大意として最も適当なものを、次のア～オの中から選び、その記号をマークせよ。

ア この身のやましきの原因は、なかなか消えるものではない。やはり石清水の神の思いのままにしよう。

イ この身のうとましきの理由は、何であるかわからない。だから石清水の神もやはり考えてはくれないだろう。

ウ この身のむなしきについては、むしろどうしようもない。けれど石清水の神の心はきつと許してくれるだろう。

エ この身のつらきについては、むしろどうこうと言うまい。たとえば言わなくとも石清水の神はわかってくれるだろう。

オ この身の苦しきについては、なかなか言いつくせるものではない。むしろ石清水の神のようにだまっただままでいよう。

--

問四 傍線⑦「母もはづかしくなりて」とあるが、母が「はづかしく」なった理由として最も適当なものを次のア～カの中から選び、その記号をマークせよ。

ア 娘の八幡神への願いが、あまりにもささやかでひかえめだったから

イ 娘の八幡神を頼る様子が、あまりにも自分勝手であきれてしまったから

ウ 娘の八幡神を信じ頼る様子が、堂々として落ち着いていたから

エ 自分の過去のあやまちを、それとなく娘にさとされたから

オ 自分の現在のありさまを、神が許すとは思われなかったから

カ 自分の将来のことばかりを考えて、神に祈願したことを反省したから

--

問五 傍線⑧「に」と同じ意味・用法のものとして最も適当なものを、次のア～オの中から選び、その記号をマークせよ。

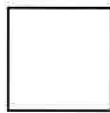
ア 秋来ぬと、目にはさやかに見えねども

イ かぐや姫、きと影になりぬ

ウ いみじく泣くを見給ふも、すずろに悲し

エ 親たちは、はや失せ給ひにき

オ 破り捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず



第十講

あてなり 【貴なり】

いうなり 【優なり】

えんなり 【艶なり】

なまめかし

やさし 【優し】

優美である

上品である

cf. なまめく || 若々しく美しい

世

世の中

① 男女(夫婦)の仲

② 世間・社会

あいぎやう 【愛敬】 (名)

① かわいさ・かわいらしさ

② やさしさ

うしろやすし【後安し】
こころやすし【心安し】
めやすし【目安し】
やすし【安し】

安心である

⇔

うしろめたし
おぼつかなし
こころもとなし

不安である

気がかりである

うつくし【美し】
かなし【愛し】
らうたし【労甚し】

かわいい

かわいらしい

よもすがら【夜一夜】 一晩中

ひねもす【終日】
ひぐらし【日暮し】

一日中

「なむ」の識別

① 未然形＋なむ↓「なむ」一語で願望を表す
(他者への願望⇒シテホシイ)。

・花咲か^{未然}**なむ**(⇒花が咲いてほしい)

② 連用形＋なむ↓「な」と「む」が切れる。

助動詞の組み合わせで、「な」は強意または完了。「む」は推量・意志・勧誘etc.(キツト〜ダロウ)というのがパターン。

・花咲き^{連用}**なむ**(⇒きつと花が咲くだろう)

③ 体言・助詞・連体形・副詞＋なむ↓係助詞
(係り結びで強調)

・花^{体言}**なむ**咲きける(⇒花が咲いたよ！)

※係助詞「なむ」は形容詞の連用形「〜く・〜う(音便)」・形容動詞の連用形「〜に」・打消の助動詞「ず」の連用形にもつく。

要するに、「〜く(う)なむ」「〜になむ」「〜ずなむ」の「なむ」は係助詞と覚えておこう

・やさしく**なむ**(下に「ある」の省略)

・かなしう**なむ**(下に「ある」の省略)

・何ともおぼゆまじく〔なむ〕(下に「ある」または「あらむ」の省略)

・あはれに〔なむ〕↓形容動詞の連用形「―に」の下についた「なむ」は係助詞

④ ナ変動詞十む↓「死なむ」「往なむ」の場合
「死な」「往な」、一語でナ変動詞の未然形。

「む」は推量・意志 etc.

より

① 起点(〜カラ)

・寝殿より御堂の廊にかよふ女房
(||寝殿から御堂に通じる廊下を通る女房)

② 経過(〜ヲ通ツテ)

・前より行く水
(||前を流れて流れる水)

③ 即時(〜スルトスグニ・〜ヤイナヤ)

・まゐりつくより
(||参上するとすぐに)

④ 手段(〜デ)

・徒歩かちより
(||徒歩で)

⑤ 比較(〜ト比ベテ)

・都の空より雲の往ゆき来きも早まき心こちして
(||都の空よりは雲の行き来も早いように感じられて)

あかつき【**暁**】

夜明け前・朝のまだ暗い頃

うたて(副)

うたてし(形)

うたてさ(名)

不快である・不愉快である

マイナスイメージ

cf. うたてさ

嘆かわしさ・情けなさ

おどろく【**驚く**】(自)

①目を覚ます・起きる

②(はっと)気がつく

おどろかす【**驚かす**】(他)

①目を覚まさせる・起こす

②気づかせる

あいなし

あぢきなし

うし【憂し】

うたて

うとまし【疎まし】

こころうし【心憂し】

こころづきなし

むつかし

不快である・不愉快である

(マイナスイメージ)

うし【憂し】

① つらい

② いやだ

③ つめたい

なかなか

① かえって

② なまじ

ときめく【時めく】(自)

① 寵愛を受ける・寵愛される

② 時勢に合い栄える

ときめかす【時めかす】(他)

寵愛する

やがて

① そのまま

② すぐに

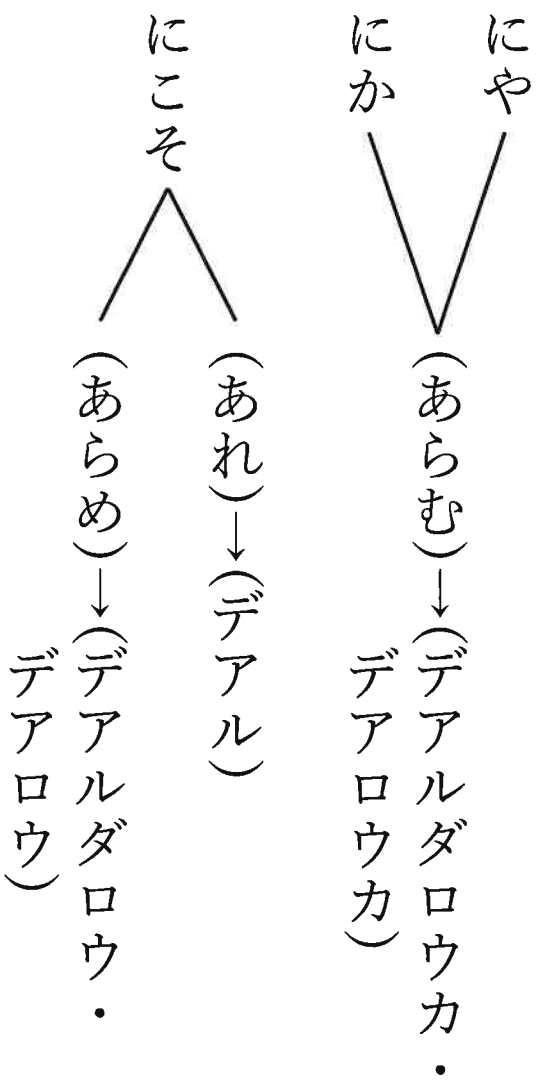
いみじ

① たいそう
①+ すぐれている・すばらしい・立派である

①- 不吉だ・ひどい・大変である
悲しい

② (程度を表し)
たいそう〜・とても〜
ひどく〜

〈省略〉



◎歌徳(得)説話

主人公ピンチ ←
上手な歌を詠む ←
仲直りをする ←
出世できる
結婚相手に出会う
罪を許される
ほうび(着物・衣)をもらう











ちよつと前（または、そう遠くはない昔）、若くて（||しつとりと）美しい女性がいた。世の中が絶えそうになったが（||生活が苦しくなったが）、見た目容貌（顔かたち）のかわいらしかった娘を持つていた。（娘は）十七、八歳ほどであったので、「娘を、何とかして、安心な様子にならせよう（||裕福な暮らしをさせてやりたい）」と思つた。かわいらしさの余りに、石清水八幡宮へ娘と一緒に泣きながら参詣（お参り）をして、一晚中、八幡の御前で、（次は女房のセリフ）「わたしの身は、（娘さえ幸せであるならば）今となつてはどのようでも（||どのような状態でも）おりましよう（↓今となつてはどうなつてもかまいません）。この娘を安心な様子で（||にして）お見せください」と数珠をすつて、泣きながら申し上げたのに、この娘は参上し、着くやいなや（||到着するとすぐに）、母のひざを枕にして、起き上がり寝てしまったので、明け方になつて母が（娘に）申すこと、「どんなにか決心して、かなえられない心と思ひながら、徒歩で参詣したのに、このように一晚中神も『感心だ』とお思ひになるほどに（祈願を）申し上げなされるべきなのに、思うこともなさそうに（||何も考えずのんきに）寝ていらつしやつてゐる、情けないことよ」と、くどくどと言つた（ようするに、ぐちをこぼしたわけよ。）ところ、娘は目を覚まして、「思い通りにならない気持ちが悪しくて（||つらくて）」と言つて、

わが身のつらさをかえつてなんとも言ふまい。（↓なんとも言わなくとも）石清水の神様は私の心はくみ取つて知つてゐるだろう（||理解してくださるでしょう）

と詠んだので、母も（または、は）きまり悪くなつて、何も言わないで（参詣から）帰る途中で、七条大路と朱雀大路の（交差する）あたりで、いまの世の中で時勢にあい榮えていらつしやる殿上人が、桂から遊んでお帰りになつたが、この娘をとつて、牛車に乗せて、そのまま正妻にしてほしいそう幸せにした。八幡大菩薩は、この娘の歌を受け取つたのでありましようか。（娘が幸せになることができた原因は和歌なんだよ）